11.我谷ダムの影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北川, 賢佑 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9714

11. 我谷ダムの影響

北 川 賢 佑

1. はじめに
2. 我谷町について
3. ダム建設の経緯
4. ダムに対する当時の心境、意見、様子
5. ダム建設が住民生活に与えたもの
6. おわりに

1. はじめに

西谷地区について調査実習を進めていく中で、そこに住む人たちは少なからずダムの存在から影響を受けていることを知った。ダムは環境を人工的に変化させることで、人びとの生活に強制的な変化をもたらす。私自身の日常生活では、水に困ることはなく、洪水にあうことも滅多にない。そして、それがずっと当然のことであった。ダムについて考えることのなかった私に対して、ダムについて考えざるを得なかった住民の人たちという対照性、自分の故郷が失われることへの思い、新しい生活に対する意識、さらに現在の心境といったことについて関心を持った。

夏の本調査に実際に我谷ダムに訪れることができた。個人的な印象としては、想像していたものとは違い、湖のように感じられた。見る限りその底に一つの集落が沈んでいることは全く分からなかった。しかし、実際には田んぼや畑、住家、学校、郵便局、神社、駐在所などが水没しているのである。

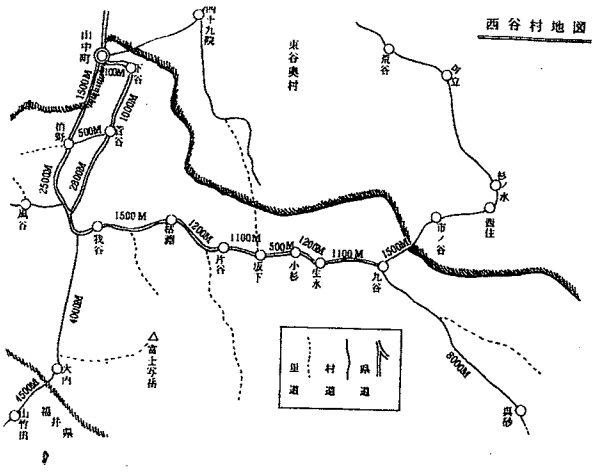
本章では、我谷ダムの建設の経緯に関するデータを軸にして、移住を経験した人たちへの聞き取りから得られた情報をできる限り記述し、我谷ダムが住民に与えた影響について考察していく。既存の資料から見えてこない、この種の情報は時が経つにつれて失われていくけれど、本章でたとえ少しでも形に残したいと考えている。

2. 我谷町について

現在の我谷町は、大聖寺川の上流、大内川の合流点から本流に沿って位置し、ちょうど栢野町の隣にある。「現在の我谷町」という書き方をしたのには理由がある。それはこの町が昭和40(1965)年に完成した我谷ダムにより、その場所を移したということだ。最終的に集団移住地として、新釣り橋をはさむ我谷地内と栢野矢走り地区に決定した。このとき我谷町は我谷ダム建設にともなう補償金で栢野町から土地を買った。これが現在の我谷町である。本節ではまず、我谷町について書いていきたいと思う。なお、移転以前を旧我谷町、移転以後を新我谷町と表記することにする。

旧我谷町は、大聖寺川の深い渓谷に沿い、西谷地区の中間に位置し、上流は九谷方面、下流は山中方面へ支流の大内峠を越えると越前へ通じる交通の要地でもあった。周囲は富士写ヶ岳（標高942m）を始め、高い山々に囲まれていた。「我谷」という地名の由来は定かではないが、地内の西谷地区では「わがた」と俗に呼んでおり、『三州地理志稿』にも村内に輪形ヶ岳という山を挙げている。これが「我谷」の地名の由来だと考えることが出来る。

図1　西谷地区の地図（我谷ダム建設前）



出所：『西谷村誌』

昭和10（1935）年のデータによると、我谷町の世帯数は35戸で、人口は227人（男120人、女107人）。我谷小学校（明治8～昭和49年）、巡査駐在所（明治26～昭和45年）、西谷郵便局（昭和4～昭和60年）があり、西谷地区内で重要な地域であったことがうかがえる。しかし、現在では、この地域で重要な役割を果す、それらの施設はいずれも廃止・統合されている。表1を見る

と、我谷町の世帯数・人口は減少傾向にある。これは我谷町だけでなく、西谷地区の大部分で見ることのできる傾向である。

表1　我谷町の世帯数・人口の推移

	1879	1889	1920	1935	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
世帯数	40	43	47	35	19	20	19	15	17	19	17	18
人口	226	243	211	227	138	97	78	61	64	69	53	48

出所：『西谷村誌』p.33、『市町村地区別人口および世帯の概数』より筆者作成

表2　我谷町の生業（昭和10［1935］年）

農業	5
木地挽き	2
製炭業	4
機業工場	1
交通運搬業	3
大工	2
左官	4
その他	14
合計	35

出所：『西谷村誌』p.34

また、表2から分かるように、旧我谷町の生業では農業・製炭（半農半製炭）の家が多かった。製炭、いわゆる炭焼きは、昭和前半までさかんだった。それ以降はガス、灯油などの石油燃料の一般家庭への普及や、我谷ダム建設による影響を受け衰退していった。そして現在では炭焼きは行われていない。また、移住後の職業は、漆器関係の仕事に従事したり、温泉街に勤めに出る人が多くなった。

農業は米や野菜、さらに桑、麻、柿などを作っていたが、農業に適した土地ではなかったようである。また、冬季（12月～3月）は積雪のために、農業・製炭ができなかった。だからその間は雪下ろし、わら仕事（縄、わらじ、ぞうり）製炭の仕事の準備などをして過ごしていた。わら仕事は子どもたちも手伝っていた。

この地方の道路は狭く、凹凸が多い危険な道であったようである。そのため、生産物を運ぶのに苦労し生活は楽とは言えなかった。日用品を買ったり、木炭を売ったりするのに福井の大内や金津へ行くこともあった。その際に使われたのが風谷峠と大内峠である。

風谷峠とは石川・福井両県を北寄りの山間部で結ぶ峠。風谷町と福井県坂井郡金津町を結ぶ。北側約1ｋｍに刈安山を通る自動車道路（林道）ができて以来、峠は廃道化した。

大内峠とは国道364号に沿う石川・福井両県境の峠。山中町大内町と福井県坂井郡丸岡町山竹田を結ぶ。古くから加賀・越前を結ぶ交通の要所として開かれ、藩政期には番所を置いた（『角川

日本地名大辞典石川県』pp.172、253 参照)。

それらとともに山中側は菅谷、栢野、奥側は風谷、枯淵とも交流があった。明治 19（1886）年に元祐庄与門らの努力によって、山中～九谷間の車道が開通した。それからは、福井との交流よりも山中方面との交流が盛んになった。また車道が開通したといっても、依然として道が良いとはいえない状態であった。

昭和 20（1945）年頃、一週間に一度、自転車もしくは自動車で山中へ買い物に行っていたという話を聞くことが出来た。この方は、仕事の都合上、早い段階から自動車を持っていたそうで、持っていなかった人たちと比べると条件は良かったと言っていた。それでも頻繁に山中に行くことはできなかったそうである。なお自転車は昭和に入る頃に、普及し始めたそうだ。そして、冬は雪のために道が通りにくくなるために米や日用品は買い溜めをしておいて、保存の利くもの中心の食事をしていたという話もしてくれた（A 氏　80 歳代、男性)。

3.　ダム建設の経緯

我谷ダムが建設された目的は主に大聖寺川総合開発（洪水の防御に加えて、かんがい補給および発電を含む）である。具体的には、山中町我谷町地内に、高さ 56.5m の重力式コンクリートダムを築造し、総貯水量 1010 平方立方メートルの貯水池を設ける。

重力式ダムとは、主にコンクリートを主要材料として使用し、コンクリートの質量を利用しダムの自重で水圧に耐えるのが特徴である。膨大なコンクリート量が必要であり、アーチ式ダムほどは条件は厳しくないものの花崗岩・安山岩等基礎岩盤が堅固な地点でないと建設する事が出来ない。ダムとしては最も頑丈な型式であり地震・洪水に強い事が利点のため、地震や降水量の多い日本では最も適した型式でもある（出典: フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）　重力式コンクリートダム)。

我谷ダム建設により治水面で最近十ヵ年平均(昭和 25－昭和 34　1950－1959)年の土木災害 730 万円、一般災害 5340 万円、計 6070 万円に上る洪水被害を防御する。

かんがいでは、夏季渇水期の不足水量 260 万立方メートルを補給放流することにより、年間米 2676 石（1881 万 9000 円）の増産を図る。

発電では、最大出力 6700kW の発電等が可能となる。貯水池式発電のため、冬季渇水期の補給源として価値が大きいとしている。

そして、昭和 26（1951）年～昭和 30（1955）年まで四年間の予備調査の結果から、県は我谷地内にダムを建設することに決定した。その間に、県、山中町・町議会と地元我谷町、枯淵町、栢野町との間で、ダム建設についての説明会、立ち入り調査・測量調査・交渉等が数十回続けられ、

我谷発電所の位置問題を残して昭和36（1961）年3月22日、工事に着工した。昭和39（1964）年5月28日金沢地裁の調停を経て、県と地元で和解が成立し、発電所の位置問題は解決した。昭和40（1965）年3月31日、ダム堰堤が完成。翌41（1966）年4月1日、県営我谷発電所も完成。これは大聖寺川右岸に建設され、発電の最大出力は5,600kW。 取水は発電所上流に設置された我谷ダムから、約0.7kmの導水路を通じて行っている。

表3　ダム建設によって水没した我谷町の土地

田	35.7反（約353アール）
畑	56.4反（約558アール）
山林	387.3反（約38ヘクタール）
宅地	3186坪（約10546平方メートル）

出所：『山中町史現代版』p.537

表4　ダム建設によって水没した各種施設

住家	32
学校	1
郵便局	1
駐在所	1
神社	1

出所：『山中町史現代版』p.537

表5　水没戸数の職業

農林業	16
製材所	2
会社員	6
漆器関係	2
石屋	2
大工	1
運送業	1
公務員	1
機場	1
計	32

出所：『山中町史現代版』p.537

表3、表4、表5はダム建設による我谷町の水没に関する表である。そして、新たに移住先となったのは、新つり橋をはさむ我谷地内と栢野矢走り地区であった。昭和37（1962）年7月頃までに、集団移住者の我谷地内に5戸、栢野矢走り地区に19戸の計24戸の移住が完了した。集団移住地に、郵便局、小学校、駐在所も移転されたが、小学校は菅谷小学校に統合、郵便局、駐在所はそれぞれ廃止されている。移住後の職業は、漆器関係の仕事に従事したり、温泉街に勤めに出る人が多くなった。なお墓場と神社も移転された。

また、他の地区への移住は、山中温泉の温泉街へ1戸、上原地区へ1戸、菅谷地区へ3戸、下谷地区へ2戸、加賀市山城地区へ1戸である。（出典：『山中町史現代版』pp.535-538）

4.　ダムに対する当時の心境、意見、様子

我谷ダム建設計画の段階では、故郷を離れたくないということでダム建設に対して反対意見が多かったが、次第に反対と賛成に分かれていき、最終的に賛成の方向に決定した。そして、昭和40（1965）年に我谷ダムが完成したわけであるが、ダム建設から完成に至る時期に、移住することになった住民が抱いていた心境を採り上げていきたいと思う。

4.1 我谷ダム建設自体への反対意見

A 氏は「我谷ダムが建設される案が出た、最初の頃は慣れ親しんだ土地から離れたくないという理由で反対をしていたけど、最終的には県や国からの圧力もあって和解することになった。県からの要求にずっと反対することはできなかったんだ」と語ってくれた。また、B 氏（70 歳代、男性）は「反対したが、反対したって何も得しない」と言っていた。当時のダム建設に対する嫌悪感がうかがえる。

このように反対をしていた人たちの多くは、山や畑など土地を持っていた。建設計画の時代は、土地の価値は高く、木炭による収入もかなりあった。しかし、石油燃料の一般家庭への普及などの影響を受けて、昭和 30（1955）年頃から農業や木炭の需要が下火になり、昭和 40（1965）年頃にはほとんど収入にならなくなったようである。これがダム建設を受け入れる大きな要因になったようである。

4.2 我谷ダム建設によって支払われる補償金への意見

C 氏（70 歳代、男性）は「移住に対しては多額の補償金が支払われた。補償金額は家を建てるには十分な額だった。元々は小さな家に住んでいて生活が決して楽ではなかった住民も、その補償金で新しい家に住むことができるようになり、生活も豊かになった。それに、十分な金額だったからこそ、最終的に賛成となった」と語ってくれた。

しかし、その反対に B 氏のように「補償金は引っ越すのにやっとのギリギリの額しかもらえなかった。金持ちは多くもらえたが、貧乏人には幾らかももらえなかったんだ」という話や A 氏の「補償金は満足できるような額ではなかったけど、その金額は県や国によって半ば頭ごなしに決められてしまった。それを使って家を建てたりしたらお金はあまり手元には残らない程度か、もしかしたら自腹を切ったかもしれない」という話もあるように、補償金に関しては意見が食い違っていた。その背景には保持していた土地の大きい人と小さい人とでは、補償される金額に大きく差があったということがある。

また、県が取り決めた補償金額は集団で金額指定され、細かい内訳は明かされず、結果として全体で一億五千万円ほどになったようである（C 氏）。その一方で、例えば、瓦を移住地まで運ぶのに〜円かかるといった風に補償総額を定める単価は細かく定められていたようである（A 氏）。この二つの話から補償金額の内訳の細部が住民全体には明かされない不透明さが伺える。

4.3 我谷ダム建設自体を賛成、許容する意見

まず、早いうちに賛成派となった集団は、大聖寺などへ勤めに行っていた人、自営業の人、新たに商売をしたい人などである。それは、移住することで通勤が便利になるし、街での商売のほ

うが環境が良いなどといった理由からである。

D 氏（70 歳代、男性）は「ダム建設に特に抵抗はなかった。親が我谷ダム対策委員であったし、当時はまだまだ若かったしね」という意見を聞かせてくれた。我谷ダム対策委員というのは、石川県と我谷地区の双方の意見や様々な交渉をする際に仲介する役割を担っていたところである。また、C 氏は「計画当時は地形が悪く、生活面も良くなかったので、ダム建設に関する大きな反対はなかったよ。それよりは、補償や移住場所に関することで住民の意見の相違があったんだ」と言っていた。補償に関することというのは、補償金の額のことや、補償を現金を重視してもらうのか、それとも土地や家などモノを重視してもらうのかといったことである。移住場所は街にするのか、近場にするのかと意見が分かれたということである。

4.4 その他の我谷ダムに関する聞き取りから得られた話

家は崩さないと補償金がでないとされたので、瓦屋根の家のほとんどは一度解体してから移住地で再び組み立てられた。かやぶきの家や「クズヤ」と呼ばれる家の多くは取り壊され、新たに瓦屋根の家へ建て替えた（A 氏）。余談であるが、そういう家を崩す労力もなかったので、手っ取り早く火をつけて家を燃やし大騒ぎになったこともあるという話も聞くことができた（E 氏　70 歳代、男性）。

家の中にあった、ススでつやが出た「スス竹」を茶室に使いたいと好む人もいて、京都で高く売れたものの、ダム底に残してきた人がたくさん居た。また、我谷盆（我谷町で江戸時代初期以来、生活具として作られた木地盆である）をはじめとする生活用具もほとんど残してきた人が多かった（E 氏）。

現我谷町へ移住する際、栢野から土地を買うのに合計 1000 万円かかった（坪 5500 円くらいで元々田んぼだった土地）。他の地域に移住した人たちは土地をすべて売ってお金に換えた。なお、元々持っていた我谷の土地（旧我谷町に含まれるが、水没しなかった土地）に移住した人もいる（C 氏）。

移住前は枯淵地区など奥西谷の人たちとの交流をしており、栢野地区などとはあまり交流がなかった。移住してからは、栢野の人たちとの交流が増えて、奥西谷の人たちとの関係は薄れていった（A 氏）。また、C 氏のように「交流関係は学校や婚姻関係が大きく関係するものであり、ダム建設はそれほど影響がなかった」という意見も聞くことができた。

水没した、八幡神社の大きなスギ、ケヤキの木は伐採して売られた。こういった共有財産を売った金や補償金などで現在も地区の財政は豊かである。現在でも共有財産への補賞金が 1500 万円くらい残っている。県営我谷発電所から年間 8 万円、新我谷町の収入として入る（C 氏）。

5. ダム建設が住民生活に与えたもの

我谷ダム建設から約40年経った現在、住民の方々は我谷ダムについてどのような意見、感情を持っているのだろうか。ここでは、A氏の話を中心に書いていきたいと思う。

A氏は「当時は惨めだったけど、今思うと生活の水準は前進したのでよかったかな」と、話していた。具体的に移住して良かった点は、「街に近くなったので買い物がしやすかったりして、生活が便利になったことが大きい」ということ。反対に悪かった点は、「畑や田の大部分も水没してしまったため、自分の田畑で賄えていた分の食物を買わなければいけなくなり、生活費が嵩むようになったこと」や「仕事が変わること。これは時代の変化もあったからダム建設だけによるものではないから何とも言えないけど」ということである。仕事は、製炭の仕事から漆器関係か日雇いの仕事に就く人が多かったようである。A氏は移住のことを話す際も終始穏やかで、今では移住したことに対する不満は残っていないような感じを受けた。しかし、B氏の「引越しが大変だった。もう二度としたくない」というように、現在でも否定的な意見もある。

聞き取り調査を行っていく中で様々な意見を耳にし、住民に適切な補償がなされていなかったのではないだろうかと疑問に思った。確かに我谷ダム建設は、洪水調節機能や、都市化、工業化、ライフスタイルの変化で、増え続けていく水需要・電力需要を満たすためには必要だった公共事業であった。私が聞き取り調査を実施できた、我谷ダム建設による移住を経験した住民の方々は全体の一部である。それにもかかわらず、住民の方々の意見は食い違う。その理由として、移住からの長い月日が意識の変化をもたらしたことを考慮したとしても、県や国からの住民全体を納得させるような十分な説明、補償がなされなかったと考えることが自然である。ダムは、家屋水没という町民の犠牲の上の計画であるから、たとえどんな補償をしたとしても全く同じ生活を与えることはできない。そういう意味では住民全体を完全に満足させることはできないだろう。しかし、人生の転換を強いられた人たちを納得させるだけの補償は必要だったはずである。そういった補償がなされていれば、先にも採り上げたA氏の「最終的には県や国からの圧力もあって和解することになった。県からの要求にずっと反対することはできなかったんだ」という意見は生まれなかっただろう。県や国が住民に対して圧力をかけるなどというやり方は、我谷ダム建設が急務であったとしても強引すぎたのではないだろうか。また、国や県は情報公開を徹底したのか疑問に残る。

5.1 新我谷町の現状

新我谷町の人口減少の一因は我谷ダム建設による移住である。つまり、我谷ダムは新我谷町における現在の生活にまで関係しているのである。現在、新我谷町では4月15日に八幡の春祭りと

10月2日に八幡の秋祭りが行われている。住民の高齢化や人口減少などの理由から、両方とも神事のみである。人が少なくなる以前は、我谷町だけでの宴会や踊りをする行事もあったが、そういった行事は現在行われていない。

新我谷町の役員は町内会長、前役（次の年の町内会長）、後役（前の年の町内会長）が中心であり、この三つを合わせて三役と呼んでいる。新我谷町の財源は、一般会計と特別会計である。特別会計とは主にダム建設補償などが財源となっているものである。一般会計はその収入が町民の支出によって成り立つものである。そこには町内会費や小物成と呼ばれる、新我谷町に土地（山、田、畑）を所有する者から取る町民税のようなものが含まれる。小物成は土地の価格と面積から決められる。西谷地区を離れた人であっても、新我谷町地内に土地を持っていれば払う必要がある。近年、土地の価格が安くなってきていることなどから、小物成の全体の収入に占める割合は減ってきている。また、集めた資金の使用用途は、神社関係費、補修費（水道菅など）、墓や市道の整備費、各団体（婦人会や宝寿会）への助成金、消防団員や町内会長への手当などである。

平成19（2007）年の時点で、婦人会には12人、西谷地区の老人会である宝寿会には20名程度、新我谷町から参加している。

現在、新我谷町の住民の交通手段としては、自動車が主である。バスは栢野町までしか通っておらず、西谷地区を回るそのバスの運行本数も減数の方向に進んでいる。新我谷町は国道沿いにあるため、除雪が早い。

5.2 九谷ダム

さて、我谷ダム完成から7年後の昭和44（1969）年に、流水機構の変化、上水道用水の需要増加にともない、枯淵町地内に九谷ダムの予備調査がスタートし、23年間という年月をかけて地元地権者の99%の合意を得て、平成17（2005）年に完成した。九谷ダムの集団移住地は加美谷台地という所で、集団移住した地権者は約50%であった。ここにはダムによる移住者のほかに、他地区からの移住が相次ぎ、110戸の大きな町内会となった（平成4［1992］年）。町内には、石川県立山中県民体育館、山中中学校、山中ふれあいスポーツ広場など公共施設があり、近くに国立山中病院、山中小学校がある。残念ながら、九谷ダム建設による移住者の話を聞く機会を持つことはできなかった。しかし、我谷、九谷ダムは非常に身近な存在でありながら、集団移住地を町が新たに造成した土地としたという形は、我谷ダムの集団移住地のとった形とは異なる形式であり注目すべきである。

6. おわりに

まず、調査に協力してくれた西谷地区の方々に御礼を言いたい。私は実際に西谷地区に訪れる前は、我谷ダム建設にはそこに住む住民全体が反対をしていたものだと考えていた。しかし、間違ったイメージであった。確かにダム建設に反対する住民が多かったのも事実であるが、仕事の都合上賛成した人もいた。ダム建設自体ではなく、その補償に対しての意見の相違があった。その他、複雑な状況があったということを知ることができた。我谷ダムによる移住を経験した住民の一部の方にしか話を聞けなかったこと、九谷ダムによる移住を経験した方々の話を聞く場を持てなかったことはとても残念である。この章で挙げられた話以外にもさらに多様な意見があるだろう。しかし、住民の一部の方々の話はとても貴重なものであり、この報告書に載せられたことに満足している。

新我谷町の住民の方々は、ダム建設による移住を受け入れて現在にいたるまで生活をしている。ダムは何よりも、水源地の住民に生活の場の放棄という犠牲を強いる。こうした人の理解と協力なしで、水源の確保はできない。我谷ダムだけでなく、全国各地のダムのおかげで我々の生活は支えられている。この調査実習を通じて、自分の生活における水の豊かさのありがたみを再確認させられた。